



考える ことば の事典

佐藤眞生

マオじいの結

「考えることばの事典」／目次

はじめに 4

一、「考える」を考える 8

二、考える作法 11

三、考えることば 14

その1、本質問題 14

その2、身体用語 28

その3、身体機能用語 57

四、意味共有のないことば

—使わない・言い換える

69

五、 身体の声	81
六、 身体機能の声	96
参考文献	100
挿絵作家のことば	102
あとがき	104

はじめに

いま、日本人は考えることを止めている。あるいは考えることを放棄している。特に本質的な問題について殆ど考えていない。

それは使われていることばに表れている。

まず、ことばが間違っている。例えば、講師に向かって「今日は耳障りなお話をありがとうございますでした」という。「耳障り」は褒め言葉ではない。

次に、勘違いしやすいことばを使っている。例えば、「飛ぶ鳥跡を濁さず」とか、「枯れ木も花の賑わい」という。飛ぶ鳥ではなく「立つ鳥」、花ではなく「山」である。

さらに、日本語の基礎的な能力を欠いている。意味の定まった伝統的な日本語を知らない。例えば、一所懸命、精一杯、全力でということばは、大和言葉では「たゆまず弛まず」というが、このことばはいま殆ど使われない。倦まず弛まずには、飽きることなく、緊張が緩むこともなく、集中して努力し続けるという意味がこめられている。もうひとつだけ例をあげよう。「まっ全うする」ということばである。この大

和言葉も殆どの日本人が知らない。これは役割や仕事をすべてしつかりやり遂げるという意味である。

いま、日本人はことばを学ばず、いじりすぎる。奥の深い日本語の語彙や論理が身につけていない。だから考えることができなくなっている。日本語が亡びつつある。母国語を失うことは足場がなくなり、日本の文化にとって悲惨である。緊急事態といつていい。

人間存在の本質にかかわる問題は、伝統的な日本語でなければ考えることができない。微妙な思考をするには母国語しか使えない。

伝統的な日本語とは、時代を越えて使い続けられてきて、多くの人々にとって意味や感性が共有されていることばである。

ところが、意味の定まった伝統的な日本語は、まだ誰も整理し体系化していない。未開の分野である。この書はその手がかりをつかむひとつの試みである。

まずは、人間存在にとって「本質問題」とは何か、を問い直してみたい。人間存在の根源にある核心は何か、である。

次に、伝統的な日本語の系譜を「身体用語」から解きほぐしてみたい。人間は生まれたときから十歳くらいまでは心と身体がひとつで、心身未分・心身不離・心身一如であった。物事を考えるときは身体から発想した。その意味で身体から発することは、身体についたことばを、物事を考える基礎語彙（こい）と考えたい。

もうひとつ、「身体機能用語」も基礎語彙である。身体の機能に別の意味が付加されたことばも身体の声である。

本質問題や身体用語・身体機能用語は、単なる意味を越えて、考えることばとして、できるだけ縄文的語釈をこころがけたい。

ちなみに、私の縄文観は、「自然の摂理に遵う」生き方、「生かされてある」という存在認識、生かされてある故の「役割使命」の自覚、「すべての生命の連鎖と循環」、「人間の精神的「一体性」を核にしている。

すべて手さぐりであり、浅学非才を最初に深謝しておきたい。

書名を「辞典」ではなく「事典」にしたのは、身体や身体機能についたことばのすべてを取り上げるのではなく、「物事を考える基礎語彙」であろうと、私が判定したことばについて考えたいという理由からである。

この書は、今の日本を憂える人たち、何とかしたいという志を持つ人たちに捧げる。そういう波動の伝わる有志に吟味してほしいと切望する。

一、「考える」を考える

考えるとはどういうことなのか？考えてみると難しい。例えば、「考」という字は「腰の曲がった老人」という意味である（『新漢和辞典改訂版』大修館書店）。腰の曲がった老人がものごとを見極めていくということなのかもしれない。

同じ漢和辞典によると、「覈カクに通じてかんがえる意に用いる」とある。覈には、調べ確かめる、厳しい、種、迎えるという意味がある。

古語辞典では、「かんがふ」「かうがう」となり、検討して判断を下す、事実を究明して罰を下すとある。

どうやら考えるということは、厳しく調べて種をみつけることのようなのだ。思いつきではないけない。本質を調べなければならぬ。そうして最も重要なことをみつけて、判断しなければならない。

物事を考える手順は次のようになる。

第一に、問題を正確に定義すること。何を解明したいのか、何を解決したいのか、あるいはどんな真理や未来を明らかにしたいのかを明確にすることである。

第二に、その問題の全体における位置づけを明らかにすること。全体を構成している要素がどれくらいあり、その、どの要素の問題なのかを示すことである。

第三は、全体との関係を明らかにすること。問題にしている要素が、全体を構成している各要素とどんなつながりにあるのか、むすびつきの内容や強弱を示すことである。

第四に、調査や予測、あるいは企画の方法を示すこと。調査や予測の方法はたくさんある。企画のやり方も多岐にわたる。

第五に、その上で自分の判断基準を示すこと。自分の判断基準はまさに自分自身の価値観である。

第六は、判断の結果を示し伝えること。判断の結果は正しいか間違いかだけではない。正しいともいえるし、間違いともいえる場合もありうる。

第七に、考える前提として、物事を考える語彙が豊富なこと、自分の考えを伝える論理、つまり、筋道が確かなこと、これが求められる。



二、考える作法

最も重要なことは、「身体から発想する」ことだと思う。身体の声を聴き、脳で考えないことである。身体は心地よいことを選ぶが、脳は心地よくないことを選ぶ。間違ひはここから始まる。十歳くらいまでの子どもは心身未分だから常に身体に遵^{したが}つていて自然である。心身分離した人間は経験や先入観や理屈で考えるので、ほとんどが身体に心地よくないこと、否定的な発想になる。人間は本来、脳で考えない方が自然である。

身体発想は「直観」につながる。画期的な発見や発明はそのほとんどが直観から発している。直観に導かれない理論は間違っているという先達も多い。

英語に堪能な研究者の多い韓国に比べ、日本人のノーベル賞受賞者は多い。例えば、中間子の湯川秀樹、猿の個体識別法の今西錦司、自発的対称性の破れの南部陽一郎、分子進化中立説の木村資生などである。これは日本が翻訳文化に恵まれ、日



本語で科学できる世界でも稀有な国だからといわれる。そして、日本語による思考が創造的知見につながるからだといわれる。

直観は経験や理論によらずに、直接に真理や本質を知ることである。真理や本質は脳ではなく身体が感得するものだと思う。直観は単なる勘ではない。直感でもない。

自然の分身としての人間の身体が自然から受け容れるものだと思う。直観をわかりやすく容にするのが理論である。
かたち

すべての人間に直観が備わっていれば、ことばはいらない。しかし、そうでないのが実際だから、ことばを使って伝えるしかない。考える道具はことばである。そうであるが故に正しい言葉を使わなければ考えを示すことも、伝えることもできない。

い。ここで問題になるのが、「伝統的な日本語」である。

日本人だけでなく、どの国の人間でも本質的な問題を考える場合には母国語しか使えない。例えば、日本人は英語で生き死にのことは考えられない。日本語でなければ死生観について深く考えることはできない。

伝統的な日本語の基礎語彙は「身体用語」であり、「身体機能用語」であろう。身体用語は、身体の部位を表すことばに別の意味が付加されたことばである。身体機能用語は、身体 of 精神機能・身体機能・生理機能・感覚機能に、別の意味が付加されたことばである。ものごとを本質的に考える場合には、この二つの基礎語彙を使う場合が顕著である。

伝統的な日本語は多くの人々に意味が共有、認識され、取り違えが起こらないことばである。広範であいまいな意味に理解されることばは使ってはならない。

三、考えることば

その一、本質問題

本質とは、人間存在の根源にある問題である。人間にとって最も重要な問題である。どんなことがあるか。

すべてつながりがあるが、次の問題を取りあげたい。

(1) 宇宙観

宇宙とは何か？

宇宙とは万物を包含する無限の空間であるといわれる。気の世界ともいわれる。しかも、その真理は永遠に人知では知り得ないと思われる。

(2) 自然観

自然とは何か？

自然とは成り成りて成れるもの、自ずから成るものといわれる。変わるべくして変わるともいわれる。

自然は明らかに物質世界である。しかも、その物質世界の運動原理は恐らく永遠に人知の及ばないものと思われる。

(3) 循環

一回りして元にかえることを繰り返すこと。自然界は循環する世界である。人類そのものも巡り巡って元にかえることを繰り返している。血液をはじめ人間の身体も循環している。

中国に『五行循環説』というのがある。これによって宇宙のすべてのことが解明できるとされる。木から火が生じ、火から土が生じ、土から金が生じ、金から水が生じ、水から木が生じるといって考え方である。五つの要素は方角・朝晩・人間の臓器にもあてはめられている。

木——青——春——東——肝臓

火—赤—夏—南—昼—心臓
土—黄—土用—中央—午後—脾臓
金—白—秋—西—夕—肺臓
水—黒—冬—北—夜—腎臓

(4) 全体観

部分を全部集めても全体はわからない。細分化や分類の集積によって全体は把握できない。全体は全体としてとらえなければならない。

自然を細かく分類するのではなく、自然を全体としてとらえる自然学が求められる（今西錦司）。

人間を細分する前に人間を全体としてとらえる人間学が必要である（小原秀雄／岩城正夫）。

(5) 神

全知全能の霊とされる。人智を超えた存在である。天であり、地であり、自

然そのものともいえる。

(6) 魂

生命の原動力とされる。肉体と精神のほかに意識体としての魂は存在するの
か？ それは一体何か？

(7) ころ→次に述べるような理由で、この本ではかなの「ころ」を使う。

ころとは何か？

古代文字の「こ」は、舟とか漕ぐ
という意味である。「ろ」は艚である。
ころとは艚で舟を漕ぐこと
である。舟は太陽を運ぶための
もの。太陽は旭と呼ばれ、太陽と舟は、
日子・比古・彦と書き、神の原点
とされる。ころとは太陽、つまり、



世界観・理念・基本方針を運ぶものである。

ここはどこにあるか？

ここは人間の身体の働きである。かつては「腹・腸」にあるとされていた。現代でもところが腹・腸にあるという説は根強い。しかし、近代になって、ここは「心臓」にあるという説が唱えられ、現代では「脳」にあるという説が主流である。

(8) 愛

愛とは深い関心である。愛とは観察であるといってもよい。関心がある故に観察し、その結果、「知ることは愛につながる」という格言もある。

(9) 夫婦

結婚して夫婦になるということは男女が愛で結ばれて、お互いを死に場所として決めることである。

(10) 家族

夫婦親子などの血縁関係で結ばれた人間の集団。ネイティブ・アメリカンのイロクオイ族は「七代先を考えていまを生きる」という。沖縄久高島には「三代の絆」といわれ祖母霊を孫娘が継承するという風習がある。

(11) 性

男女・雌雄。
しゅう

系統学的には、最初の原核生命はメスで、オスはメスから派生したとされる。その上、雌雄同体という生き物もある。動物ではカタツムリ、ミミズ、牡蠣^{かき}、ウミウシ（浅海にすむ軟体動物）、フジツボ（甲殻類）、ホヤ（原索動物）など。植物になると同じ株に雄しべと雌しべの両方がある両性花は極く普通である。雌雄同株の樹木も多い。

(12) 人間

生かされてある存在。人間は自然に生かされ、生活共同体に生かされている。

さらに、無意識や気の世界といわれる宇宙に生かされ、意識の世界である文
化にも生かされている。

(13) 身みと体からだ

身は生きている人のからだ。身は人間にだけ用いる。

体は亡骸なきがらからきており死んだ肉体。体は人以外にも用いる。

体の旧字は體である。体は豊かな骨である。骨のつながる骨格が体の根本をなす。

(14) 死生観

生きているとはどういうことか？生きているということは役割使命を果たすこと
であると思われる。

人間は死ぬとどうなるのか。魂は不滅なのか。ふたたび人間世界に再生する
のか。前世からの因縁、宿世を信奉する人々も多い。

(15) 生活

生活とは生命を活かすことである。

生命を活かす場は少なくとも四つある。家族との生活、地域における生活、仕事を通じた生活、そして自分自身の生活。

(16) 文明

発明や発見の累積により、生活上の便宜が増え、生活を便利にする。

(17) 文化

学問や芸術など真理の追究を通じて生みだされるもので、人間のこころを豊かにする。

(18) 宗教

こころの空洞を癒^{いよ}す根源的で精神的な営み。川を渡るとき、筏^{いかだ}のようなものであり、川を渡ってしまえばいらなくなると喝破したある僧侶がいた。

(19) 役割使命

人間は生かされて生きる存在として果たさなければならぬことがある。

(20) 価値観

何が最も重要かという判断の基準になる物差し。

(21) 直観

経験や理論によらずに、直接に真理や本質を知ること。直観は脳ではなく、身体が体感し体得する。

直感感覚によって物事の状況を瞬時に感じ取ることで、本質を見抜く直観とは異なる。

(22) ことば↓ことばはこころが口から発してたものなので、この本では漢字の「言葉」を使わない。

国、地域、民族、種族を同じくする者同士が意思を伝え合うために伝統的に

用いる音声。ところが口から発し出たもの。ことばは頭だけでなく、目や耳でつかむもの。身体的やりとりから理解できる意味がある。

奈良・平安時代までは、言葉の「言」と事柄の「言」は同じ言葉だったという。つまり、言葉とは事柄だった。両方の「こと」を分けるために言葉の言に葉をつけたという（古井由吉「言葉について」・「考える方法」・筑摩書房）。

（23）
文字

ことばを記号化したもの。日本語にはかな（ひらがな・カタカナ）と漢字がある。漢字は元々象形文字であり、表意文字である。漢字の意味には広がりがある。日本人は意味の広がりなことばに組み込む能力が高い。また、かなと漢字を相互に変換しながら使っている。

（24）
共同体

血縁、地縁、生活、信仰、思想などによって結合している社会集団。かつては血縁、地縁を含む生活共同体が中心だった。そこでは生活と仕事が共同体

の中に含まれていた。日本では昭和四十（一九六五）年まではこの共同体が社会を支えていた。昭和三五（一九六〇）年二〇七八戸だった専業農家が、昭和四〇（一九六五）年に一二一九戸と半減している。これは生活共同体の崩壊を意味する。

（25）都市

近代化はムラに代表される地域の生活共同体を否定して形成された。都市は政治・経済の中心地で、特定の商品の生産機能に特化している。人々は生活共同体を捨て都市に移住してサラリーマンになった。都市の昼間人口は多いが、夜間人口は少ない。都市には生産機能はあるが、人間の生活機能のすべては揃っていない。

（26）結^{ゆい}

かつてのムラのような生活共同体では、人々の大半が自給自足をしており、自給自足を補完するお裾分け^{すそわ}という贈答の習慣があり、田畑や道や山川など

の仕事を手助け合う結という仕組みがあった。結は「等価交換」で、馬を一日借りれば、結返しとして馬を一日貸して返した。

(27) 自給自足

自分でつくれるものは自分でつくる。自然から給^{たま}わるものは感謝していただく。自分でつくったものと、自然から授かったもので謙虚に感謝して生きる。

(28) ふるさと

ふるさとは、生まれて、生活して、死ぬ場所。人間は生まれた場所に適応しており、そこで生活し、そこで死を迎えるのが最も自然な生き方である。植物のように「動かない」生き方をする拠点地域がふるさとである。

(29) 経済

経世済民。世を治め、民を救うこと。その基本は自給自足の経済と、結つまり助け合いの経済と、交換財としての貨幣経済をつりあわせること。

(30) 政治

政治とは正しく治めること。政治は経世済民という経済そのものである。政治と経済は元々一体のものである。

(31) 教育

みんなで生きるための知恵と技能、一人でも生きられる知恵と技能を自ら学ぶこと。教育は教え、覚えさせることではない。自ら学び、身につけて、実践することである。基本となる教科は、国語と体育と歴史である。「国語」は正統の日本語と近代文学の古典を軸にする。「体育」は心身未分を原理とし、身体の声を聴き、最も危険な二足歩行の転倒防御に重点を置く。「歴史」は近現代史を重視し、未来の羅針盤として位置付ける。数学や物理や宗教は歴史に含まれている。

(32) 間・ま

物事と物事の間にも人為的に設けられた時間的空白。邦楽・舞踊・演劇・話芸

などで、拍と拍、動作と動作、せりふとせりふの間に入れる時間的空白。最も重要なこと。間が抜ける＝肝心なところが抜けている。

丁度良い時機・折。間がいい＝折がいい、運がいい。

大和言葉の「ま」は、本質、時間・空間を示す。

本質はある物事の不変の要素である。本質は変化するが不変の要素自体は変わらない。

時間は空間の変化によって表される。例えば、一日は地球の自転一回転である。また、一年は地球が太陽の周りを一回転（公転）することである。

その二、身体用語

身体用語とは身体を表すことばに、身体そのものではない別のことばがついたことばである。身体そのものではなく、身体に由来する別の意味が付加されたことばである。身体用語という表現は私の造語である。

身体用語を基礎語彙と考えるのは、考えるためには身体の声を聴くことが基本になると思うからである。

また、身体部位それ自体が考えることについてどんな機能とつながっているかも知ることができる。何らかの意思表示なのか、具体的な行動なのか、あるいは創作活動なのかなどがわかる。

これによつてそれぞれの身体部位が何を感じているか、身体の声がどこからきているかを知ることができる。身体のどの部位がどのような知識や感情や意思とつながっているかがわかる。

身体を表すことばについては、「家庭医学大辞典」(小学館)の分類に従い、便宜上次の七つでとらえる。

人体横断面部位、感覚器、神経系・内分泌系、循環器系・リンパ系、内臓系、筋肉系、骨格系。

(1) 人体横断面部位



あたま・頭

○あたまが上がない＝威圧されて萎縮する。

○あたま隠して尻隠さず＝一部の悪事は隠しているが、ほかの大部分が現れているのを知らない。

○頭剃るより心を剃れ＝外形よりもこころの修養が大切である。

○頭ごなし＝相手の言い分を聞こうともせず、

最初から一方的に押さえつけるような態度をとる。

○頭でっかち⇨知識や理論が先走って行動力が伴わない。

くび・首・頸

○くびをつっこむ⇨仲間に加わる。深入りする。

○くびを長くする⇨今か今かと待つ。

○首根っこを押さえる⇨相手の弱点や急所を押さえ動きがとれないようにする。

むね・胸

○胸開く⇨気分が晴れやかになる。

○胸がいつぱいになる⇨感動する。

○胸がすく⇨痛快である。

○胸が焼ける⇨重苦しく、気分が悪い。

○胸に迫る⇨ぐつとくる。

○胸を打つ⇨ずしんとくる。

○胸に染みるⅡじわじわとくる。

○胸に手を当てるⅡこころを落ち着かせてじつくり思案する。

○胸糞が悪いⅡ胸がむかむかするほど不愉快である。

○胸が躍るⅡわくわくする。

○胸が塞がるⅡ悲しみや心配で暗い気持ちになる。

○胸をなでおろすⅡ心配ごとがなくなりほっとする。

○胸を弾ませるⅡ期待や喜びでこころがうきうきする。

はら・腹・肚

○腹が癒えるⅡ気が晴れる。

○腹癒せⅡ怒りを紛らわせる。

○腹が腐るⅡ気骨がなくなる。

○腹黒いⅡこころの中で秘かに悪巧みを抱くような人である。

○腹が据わるⅡ物事に動じない。覚悟する。

○腹が太いⅡ度量が大きい。

○腹がない 度胸がない。

○腹の虫が承知せぬ 腹立たしく我慢ができない。

○腹が立つ 怒る。

○腹は借り物 生まれた子の貴賤は母より父による。

○腹も身の内 暴飲暴食を慎め。

○腹に一物 ところのちにある考え。

○腹を読む 相手のところを推し測る。

○腹に収める 我慢する。

○腹に落ちる 納得する。

○腹を割る ところを通わす。

○腹を抱える 大笑いする。

○腹が膨れる 不満がたまる。

○腹変わり ところがわり。

○腹を扶^{えぐ}る 人の意中を見通して鋭く訊ね問う。

○片腹痛い 実力もないのに思い上がっている態度が滑稽でばかばかしい。

○腹^{はら}悪し〓素直でない。

○腹合わせ〓表と裏を別の布地で仕立てた帯。

○腹芸〓ことばや行動をおさえ、人間関係や政治力によつて巧みに問題を処理する。

○腹ごなし〓食後に軽い運動などをし、食べ物の消化を助ける。

○腹づもり〓ところの中に持っているおおよその予定。

○肚に染^しむ〓深く感じて忘れない。

○肚に銘^ずず〓深く感じて常に思う。

○肚を煎る〓心配する。世話をする。いらいらする。

○肚を消す〓おどろいて忘れる。

○肚を冷やす〓ぞつとする。驚き恐れる。

○胆^{たん}を練る〓物事に驚かないように修養する。

○肝が据わる〓落ち着いていて、めったなことでは動揺しない。

○肝を据える〓覚悟を決める。

○肝煎りⅡ中に立つて世話をする。

○肝を潰すⅡびっくり仰天する。

○肝っ玉Ⅱどんなことにも動じない精神力。胆力。

背中

○背中合わせ・背中同士Ⅱ互いに仲が悪いこと。不和な者同士。

○背を向けるⅡ相手にしない。

○背に腹は替えられぬⅡ差し迫った大事のためには他を犠牲にすることもやむを得ない。

○背中を押すⅡ応援する。

○背伸びするⅡ自分の実力以上のことをしようとする。

○背筋が寒くなるⅡ恐ろしさにぞっとする。

へそ・臍

○へそを沸かすⅡおかしくてたまらない。

○へそを曲げる〓機嫌を悪くして意地悪する。

(2) 感覚器

目・眼

○目が利く〓鑑識が高い。監督がとどく。

○目が肥える〓見るたびに鑑識の力が増す。

○目がない〓夢中になる。

○目から鼻に抜ける〓非常に賢い。

○目に物見せる〓思い知らせる。

○目は空に〓ほかのものにこころを奪われて。

○目も^{あや}絢^{うろこ}に〓正視できないほど美しく。

○目から鱗^{うろこ}が落ちる〓いままでよくわからなかったことが、突然はつきりわかるようになる。失明していた人が突然視力を回復する（新約聖書）。

○目を掛ける〓生長・発展を期待して好意的に世話をする。

○目をつぶる〓見て見ぬふりをする。

○目が高い⇨物事を見分ける力がある。

○目が利く⇨物の価値を見分ける能力がある。

○目が眩む⇨ところを奪われて正しい判断ができなくなる。

○目が覚める⇨間違いに気づき正しい方向に進む。

○目が据わる⇨瞳が一点を見すえたまま動かなくなる。

○目に余る⇨あまりにひどく、見過ごすことができない。

○目は口ほどに物を言う⇨ことばと同じように目つきは相手に気持ちを伝える。

○目を掛ける⇨かわいがって面倒をみる。

○目を配る⇨注意してよく見る。

○目を三角にする⇨怒ってこわい目つきをする。

○目を開く⇨知らなかったことに気づき、新しい境地を見出す。

○目には目を、齒には齒を⇨害を受けたらそれに相応する報復をする。

耳

○耳にたこができる⇨何度も同じことを聞かされてうんざりする。

- 耳がある〓音楽などを鑑賞する素養を持っている。
- 耳が痛い〓他人の言うことが自分の弱点に触れるので聞くのがつらい。
- 耳に逆らう〓他人の言うことが自分に不都合なので快く聞けない。
- 耳から口〓聞いたことをすぐに話す。
- 耳につく〓人に言われたことが忘れられない。うるさく聞こえる。
- 耳新しい〓はじめて聞くことで珍しい。
- 耳学問〓自分で学習せず、他人からちよつと聞いた雑学知識。
- 耳ざとい〓聴覚が鋭く他人が聞き落す小さな物音でも聞きつける。
- 耳障り〓聞いて不愉快に感じ、うるさく思う。
- 耳遠い〓耳がよく聞こえない。耳慣れない。
- 耳慣れる〓何度も聞いていて、ちよつと聞いただけですぐに解る。
- 耳寄り〓聞く機会を得てよかったと感じる。
- 馬耳東風・馬の耳に念仏〓人の意見や批判をこころにもとめず聞き流す。
- 耳を揃える〓まとまった金額を不足なく用意する。

鼻

○鼻にかける〓他よりも優れていることを見せびらかす。

○鼻につく〓不快に思う。

○鼻もひっつかけない〓輕蔑して問題にしない。

○鼻をあかす〓自己満足している者に参ったといわせる。

○鼻を折る〓天狗になっている者をへこませる。

○鼻が高い〓誇らしく思う。

○阿鼻叫喚〓とても悲惨な状況の中で泣き叫ぶ。

喉

○喉元過ぎれば熱さ忘れる〓苦しい経験も過ぎ去ると忘れる。

○喉が鳴る〓食欲が盛んにおこる。

○喉から手が出る〓どうしても欲しいと思う。

口

- 口が肥えているⅡ味覚が発達している。
- 口が奢^{おご}るⅡうまいもの以外は見向きもしない。
- 口がすべるⅡ言ってはならないことをうっかり言う。
- 口がうるさいⅡ何かにつけて小言を言う。
- 口がうまい、口も八丁手も八丁Ⅱ言うこともすることも達者である。
- 口を割るⅡ白状する。
- 口を切るⅡ最初に発言する。
- 糸口Ⅱ分類されたひとつひとつのもの。
- 口入^{くちいれ}Ⅱ人の話に口出しする。仲介にたつ。
- 口裏^{くちうら}Ⅱ口占い。相手の真意が推察できるようなものの言い方。
- 口堅いⅡ言うことが確かである。秘密などを他言しない。
- 口固めⅡ口止め。口約束。
- 口車Ⅱ口先だけのうまい言い回し。
- 口に乗せられるⅡうまいことばでだまされる。

○口寂しい〓何か口に入れるものがほしい。物足りずもつと食べたい。

○口凌ぎ^{しの}〓どうにか食べてだけはいいける。ちよつとだけ食欲を満たす。

○口過ぎ〓生計を立てる。

○口直し〓前に食べたものの味を消すために別のものを食べる。

○口慣らし〓何度も言ってみてすらすら言えるようにする。食べつけていな

いものをちよつと食べてみる。

○口寄せ〓巫女が神がかりになつて靈魂のことばを伝える。

○口汚し^{よご}〓口を汚すほどの物でしかない。

○口が減らない〓口が達者で反論や負け惜しみをいくらでも言う。

○口に任せる〓よく考えないで思いつくままに言う。

○口は禍の門〓なにげなく言ったことばが災難を招くことがある。

○口を極めて〓ありつたけのことばを尽くして、あらゆる言い方をして。

○口を利く〓ものを言う。仲介をする。

○口を揃える〓多くの人が同時に同じことを言う。

○口を挟む〓他人が話している途中に割り込んで話す。

舌

○舌先三寸〓口先だけで巧みに人をあしらう弁舌。

○舌がまわる〓うまくしゃべる。

○舌を出す〓その人が去った後で見くびった動作を示す。自分の失敗に照れた動作をする。

○舌をふるう〓雄弁にしゃべる。非常に驚き恐れる。

○舌を巻く〓非常に感心する。

○舌たるい〓言い方が甘えた様子である。

○舌長〓遠慮しないで言う。

○饒舌〓口数が多い。よくしゃべる。

○舌足らず〓ことばが足らず、意味が充分に伝わらない。

眉

○眉に火がつく〓そのままにしておくとい大それたことになる。

○眉をひそめる〓心中不快になる。

○眉を開く〓ほっと安心する。

○眉唾物〓正しいかどうか疑わしい物。

○眉毛が薄くなる〓余計なことを言っていると眉毛が薄くなる。

顔

○顔が合わせられない〓相手に会う気持ちになれない。

○顔がつぶれる〓名誉が傷つけられる。

○顔に泥を塗る〓評判を落とす。

○顔が売れる〓世間に名が知られる。

○顔がきく〓無理がきく。

○顔揃い〓集まるべき人が出揃う。

○顔負け〓優れた力量や自信たつぷりの態度に圧倒されてたじろぐ。

額

○額に汗する〓懸命に働く。

○額を集める〓寄り集まってよく相談する。

○猫の額〓狭い場所。

顎^{あご}

○顎で使う〓自分は何もせず、威張って人を使う。

○顎が干上がる〓生活ができなくなる。

○顎を出す〓疲れきる。手に負えなくなつて困る。

○顎をはずす〓大笑いする。

頬^ほ

○頬被り〓知らない顔をする。

○頬を膨らませる〓不平不満がある。

○頬が緩む〓嬉しい。

○頬を染める〓恥ずかしい。

○頬ずりⅡ親愛の情を表す。

(3) 神経系・内分泌系

神経

○神経が太いⅡたいいていのことには驚かない。

○神経質Ⅱ普通の人が構わないようなことまで気に病む性質。

○神経戦Ⅱ相手の精神状態の安定をかき乱して、不安感を増大させ、戦意を喪失させる戦法。

脳

○脳天からだす声Ⅱ頭のとっぺんから出す甲高い声。

○脳天気Ⅱ普通の人に比べて軽薄である。

(4) 循環器系・リンパ系

心臓

○心臓が強い〓ずうずうしい。

血液・血

○血が沸く〓感激、興奮してじっとしておられない。

○血を引く〓先祖の子孫にふさわしい才能を持つ。

○血眼になる〓ひとつのことに熱中する。

○血相を変える〓顔色・表情を変える。

(5) 内臓系

肺

○肺肝はいかんを砕く〓非常に苦心する。

○肺腑を衝く〓ここに深い感銘を与える。

胃

○胃を洗う〓ところを改める。

腸

○腸腎〓ところの中。

○断腸〓はらわたがちぎれる。非常に悲しい。

(6) 筋肉系

アキレス腱

○アキレス腱〓強い人が持っている唯一の弱点。

手

○水の手が止まる〓勢いよく流れていた水が止まる。

○手の舞い足の踏む所を知らず〓非常にうれしい。

○手も足も出ない〓自分の能力を超えており全く処置なし。

○手に落ちる〓その人のものとなる。

○手が付く〓一部分を誰かが使っている。女が男に犯される。

○手に唾^{つば}する〓大いに張り切る。

○手が上がる〓上達する。

○手が動く〓積極的に働きかける。

○手を汚^{よご}す〓面倒なことを自分自身でする。体面にかかわらず嫌なことに取り組む。

○手合い〓同じ類の人々。連中。仲間。同じ種類のもの。勝負をすること。

○手明き〓仕事ができるのに仕事がない。

○手遊び〓暇つぶしのために何かを手にもって遊ぶ。おもちゃ。博奕^{ばくち}。

○手当て〓予め準備しておく。病氣やけがの処置をする。

○手入れ〓直し、繕い。着手。現場に入る。

○手伝い〓すける。仕事師。土木の費^{ついで}を課する。

○手仕舞^{じま}い〓仕かけた仕事を最後まで仕切る。

○手ほどき〓初歩を教える。

- 手塩にかける〓子供の小さいときから苦勞して育てる。
- 手仕事〓手先を使つてする仕事。
- 手持無沙汰〓何もすることがなく暇をもてあます。
- 手が切れる〓關係がなくなる。真新しい紙幣。
- 手が込む〓手間がかかっている。複雑である。
- 手が付けられない〓とるべき方法がない。処置の施しようがない。
- 手を拱く〓何もしないで見過ごす。傍觀こまぬする。
- 手を染める〓ある物事をし始める。かわりを持つ。
- 手を焼く〓てこずる。
- 手が空く〓ひまができる。
- 手が後ろに回る〓悪いことをして捕らえられる。
- 手が届く〓能力の及ぶ範囲内にある。もうすぐその年齢になる。
- 手が入る〓警察の捜査が及ぶ。製作過程で人の手が入る。
- 手が離れる〓仕事が一段落して關係がなくなる。子どもが成長して世話の必要がなくなる。

○手が早い〓物事をするのが早い。異性とすぐ関係を持つ。すぐに暴力をふるう。

○手を抜く〓するべきことを省く。仕事をいい加減にする。

○手の内〓掌、権力の及ぶ範囲、手並み、ところの中の考え。手指の使い方、慣れない動作をする時脳は扱いやすい手先を使うが、手指を使い体幹や足腰を使うようにすれば身体の芯を動かせる。

○手の平を返す・手の裏を返す〓ことばや態度などをガラリと変える。

○手練れ・手足れ〓腕前が優れている。

○手玉に取る〓自由に操る。

腕

○腕の見せ所〓他人に誇れる技術・能力を持つ。その力を発揮する場。

○腕が鳴る〓腕前を見せたくて機会がくるのをしきりに待つ。

○腕をこまねく〓傍観するだけで自分は行動に出ない。

足・脚

- 足が地に着いた〓着実でけれんみやはったりがない。
- 足を滑らせる〓うまく歩けない。自由な行動が妨げられる。
- 足が乱れる〓統一行動がとれなくなる。
- 足を洗う〓よくないことをきっぱりやめる。
- 足を引つ張る〓円滑な進行を妨げる。邪魔をする。
- 足摺り〓思うようにならず、身をもがき足をふみならず。あしず
- 足場〓足をかける場所。足元の具合。立脚地。

膝ひざ

- 膝を打つ〓感心したときにする動作。
- 膝を進める〓座ったまま相手に近づく。前に進み出る。
- 膝を交える〓互いに近寄って親しく話し合う。

脛すね

- 脛に傷を持つ 〓 やましい過去や隠している悪事がある。
- 脛をかじる 〓 独立できず親がかりである。

指

- 指一本も指させない 〓 少しも非難、干渉させない。
- 指をくわえる 〓 うらやましくてしょうがない。
- 指を染める 〓 手をつける。

尻

- 尻をたたく 〓 励ます。催促する。
- 尻が暖まる 〓 同じ場所に長い間いる。
- 尻が重い 〓 動作が鈍く、なかなか動かない。
- 尻が軽い 〓 軽はずみに物事にあたる。
- 尻がくる 〓 本来自分の負う理由のない物事の後始末や苦情が持ち込まれる。
- 尻が長い 〓 他人の家に長居する。

○尻から抜けるⅡすぐに忘れてしまう。

○尻が割れるⅡ隠していたことが分かってしまう。ばれる。

○尻に火がつくⅡ物事が差し迫って落ち着かない。

○尻に帆をかけるⅡ急いで逃げ出す。

○尻を落ち着けるⅡ一ヶ所にすっかり落ち着く。

○尻を拭うⅡ他人の不始末のかたをつける。

○尻を捲るⅡ反抗的な態度をとる。

○尻を持ち込むⅡ当事者が解決できないことを間接的に関係のある人に責任を取るよう求める。

○尻重Ⅱめんどうくさがって積極的に何もしない。

○尻隠しⅡ自分の過失を隠す。

○尻切れとんぼⅡ長続きしない。途中までで完結しない。

○尻下がりの後になるほど悪くなる。語尾が低くなる。

○尻こそばゆいⅡきまりが悪くていたたまれない。恥ずかしくてじっと座つてられない。

○尻ごみ〓おじて後ろへ引き下がる。不安になってためらう。
○尻すぼまり〓口が広く底が細くなっている。はじめは強かった勢いが後になるにつれて衰える。

腰

○腰が重い〓なかなか立ち上がらない。
○腰が入らぬ〓本格的にならない。
○腰が据わる〓落ち着いて気構え充分である。
○腰を抜かす〓驚いて立てなくなる。
○腰が低い〓謙虚である。
○腰が強い〓粘りがある。

(7) 骨格系

骨

○骨を折る〓努力する。

○骨なしⅡ主義・信念・気骨のない人。

○骨抜きⅡ大切なものを抜き去る。

○骨張るⅡ意地を張る。

○骨休めⅡ仕事の合間に身体を休める。

○気骨がある、骨っぽいⅡ困難に屈せず信念を貫く強いところがある。

○骨身に任せるⅡ無駄な力を抜いて筋肉を緩めると、骨から動けるようになり、信じられない力がでる。身体の本根である骨に身を委ねる。

○骨身に染みるⅡ全身に強く感じる。

○骨身を削るⅡ苦勞を重ねて努力する。

○骨折り損のくたびれ儲けⅡ苦勞した結果が報われない。

○骨組Ⅱ物事の根本となる組み立て。

○骨を刻むⅡ深くところにとどめ忘れない。

○骨を埋めるⅡそのことに一生を捧げる。

○骨を惜しむⅡ苦勞を嫌がり、怠ける。

○骨を拾うⅡ他人の後始末をする。

○骨絡みⅡ状況がどうにもならないほど悪化する。

○骨っ節Ⅱ容易に屈しない強い意志。

○骨っぽいⅡ信念があり、しっかりしている。

○骨無しⅡしっかりした意志や信念がない。

○コツをのみこむⅡ物事をうまく行うかんどころが解る。

爪

○爪のあかを煎じて飲むⅡ優れた人にあやかるように、その人の言動を少しでも真似る。

○能ある鷹は爪を隠すⅡ才能のある人はそれを進んで人に示すことはしないものである。

歯

○歯が浮くⅡ軽薄なお世辞などを聞いて不快な気持ちになる。

○歯が立たないⅡ力量の差がありすぎ、程度が高すぎて立ち向かうことがで

きない。

○歯に衣着せぬ Ⅱ 遠慮せずけずけけとものを言う。

○歯の抜けたよう Ⅱ まばらで不揃い。あるべきものがなく寂しい。

○歯の根が合わない Ⅱ 寒さや恐ろしさでふるえる。

○歯を食いしばる Ⅱ 苦痛や悔しさを必死にこらえる。



その三、身体機能用語

身体と呼称ではなく、身体の機能に別の意味が付加されたことがある。
知情意（精神機能）、立居振舞（身体機能）、消化吸収や呼吸（生理機能）視聴覚（感覚機能）は、身体があつて働く機能である。身体機能用語も私の造語である。

（１）知情意（精神機能）

○無為自然⇨自然のままに任せて人の手を加えない。自然に遵い、その摂理に身を任せる。生滅変化することのない絶対の真理。
○同期⇨異なる者同士が呼吸を合わせ、細胞の肌理（肌のきめ、皮膚のあや）を合わせる、相手のすべてを体で感じとれる。
○意味合い⇨前後の事情も含めた意味。

- 穿^{うが}つ・穿^{うが}つた見方Ⅱ深く掘る。物事の本質をとらえた見方。
- 折り合うⅡ引き下がるのではない大人の対応。一致点をみつける。
- お裾^{すそ}分けⅡもらいものや旬のものを分けてあげる。
- 観念Ⅱ考えや意識。主観的な形象。あきらめ。覚悟。
- 対話Ⅱ親しい人同士のおしゃべりで同化を促す。
- 会話Ⅱ異なる価値観などをすり合わせ、お互いに変わり新しいものをつくる。
- 議論Ⅱ自分の価値観と論理で相手を説得する。
- 技術Ⅱ自然の法則を人間の力で征服しようとするもの。
- 技法Ⅱ自然の生命の法則のまま生かして使うもの。
- 外^{けれ}連Ⅱごまかす。正法を破る俗受けの演出。
- 言^{げん}質Ⅱあとで証拠となる約束のことば。
- こころおきなくⅡ遠慮なく。安心して。嫌味がない。
- 言^{こと}祝^はぐⅡ祝う。めでたいことばを口にすると幸いが訪れる。
- こころないⅡ思慮・分別がない。
- 認識Ⅱ物事をはつきり見分けてその本質や意義を理解する。

○物語Ⅱそのものの存在理由がにじみ出た一筋の記録。

○もの・物Ⅱ感知できる事物。思考できる事物。ことば。全体。音楽。声。

○ものをいわすⅡ力を發揮させる。

○ゆるりⅡ急ぐことなくのんびりと事を行う。

○知らぬが仏Ⅱ知れば腹も立つが、知らなければこころを動かされることもない。当人だけが知らないことを嘲る。あざけ事情を知らないのをいいことにして責任を逃れる。

○知る人ぞ知るⅡ広く知られていないが、一部の人にはよく知られている。

○情けは人のためならずⅡ人に親切にしておけば、やがては自分にもよい報いがある。

○情けないⅡふがいなさにがっかりする。

○情け深いⅡ人を思いやるところが深い。

○意に介するⅡ気にかける。気にする。

○意に沿うⅡ相手の希望や要望に応じる。

○意を汲むⅡ相手の気持ちや考えを好意的に推察する。

○意を用いる〓氣を配る。

○氣がある〓物事に引きつけられる気持ち。関心。その意志・意欲がある。

○氣が置けない〓遠慮することなく、ここから打ち解けることができる。

○氣が咎める〓^{とが}この中で悪いという氣になる。

○氣が引ける〓氣おくれする。引け目を感じる。

○氣に食わない〓好きになれない。氣に入らない。

○氣はここ〓真心がこもっている。

○氣を許す〓信用して警戒心をゆるめる。

○足るを知る〓これは次のことを知ることである。

①人間は生かされて生きている。

②人間には生かされている故の役割・使命がある。

③人間には生きるために必要な持ち分がある。

④いまここにあることを受け容れ、そこにある恵みに気づく。

⑤身体は自然に^{したが}、身体がこころを支える。

⑥違いではなく、共通点に本質がある。

⑦自分がしたいことをして、それが人の役に立つ。

○せんもう 譫妄 Ⅱ 怪我や病氣、入院や手術などで、大きな衝撃を受けると、病人だけでなく健常者でも、突然異常事態が起こる。例えば、意識混濁・幻覚・幻視・錯覚・妄想・麻痺・異常行動などである。

○ 祈る Ⅱ よいことが起こるようにと神や仏に願う。

○ 拝む Ⅱ 神仏や自然に手を合わせたり、膝まずいたりして礼をする。

○ 名は体を表す Ⅱ 名前はその人の中身実質をよく表す。

○ 知ったかぶり Ⅱ ほんとうは知らないのに、さも知っているようなふりをする。

○ 以心伝心 Ⅱ ことばによらなくてもお互いに気持ちが通じ合う。

○ 心身未分・心身不離・心身一如 Ⅱ 身体とところはつながっている。身体がこころを支えている。こころが固まって身体を縛るのではない。身体が固まるから動けないのである。だから、こころと身体を切り離して、メンタル・トレーニングなどでこころだけを鍛えても、身体は動かない。固まっている身体をほぐさない限り何も解決しない。

○ ひんしゆく 颯感を買う Ⅱ 人が眉をひそめるような言動をして、人から嫌われ軽蔑される。

○把握⇨手でしっかりとつかむ。手中に収める。事柄を正確に理解する。頭で理解するだけでなく、目や耳で身体的に理解する。

(2) 立居振舞 (身体機能)

○真つ直ぐに立つ⇨身体の中心線を真つ直ぐに伸ばす。横から見ると耳肩と骨盤と踵かかとが直線になり、骨格が真つ直ぐになっている。筋肉を全く使わずに立つ。腹筋や腰の筋肉が対等に使える。胸や背中が開放される。足の筋肉に負担がかからず、楽に動ける。尻や太腿に無駄な脂肪や筋肉がつかない。

○正しく歩く⇨真つ直ぐに立ち、脚が鳩尾みぞおちから始まっていることを意識し、鳩尾をひきあげる。顎あごを引き、視線を目の高さにし、脚の重さで振り子のように振りだす。太腿の前の筋肉の力を抜き、踵から着地する。歩幅は肩幅、足は左右とも真つ直ぐに出し、上半身を揺すらない。

○楽に座る⇨背骨のs字を保ち、反らない、前屈みにならない。足の裏をピッタリ床につける。ものに正対する。太腿の裏側を圧迫しない。背もたれや肘掛は使わない。頬杖を突かない。足を組まない。尻がずり落ちる座り方

をしない。

○聞くⅡ自然に聞く。

○聴くⅡ聴く意志で聴く。自覚して意識して聴く。全身で聴く。

聴くには、相手を受け容れる、相手を励ます、話し手の考えがまとまる、相手を観察できる、問題解決の道ができる、信頼が生まれるという意義がある。

○話すⅡ事柄や考えを伝え、説明する。直観の喪失とともにことばや文字が発明された。佳言かげんや善言ぜんげんというよいことばは人々を整え、治める力を持つ。「話す」の語源は「放つ」からきている言霊である。己の魂をことばに乗せて相手に放って気持ちを与えるのである。

○挨拶Ⅱ挨拶は推す、打つ、押し開く。挨拶は迫る、攻める、互いに近づく、接近する。元の意味は、禅宗の僧が問答を繰り返し、相手の修業の水準や本心を理解することである。

○身から出た錆Ⅱ自分の行いが原因で災いにあう。自業自得。

○身を入れるⅡ熱心に行う。

○身に染みる〓ここに深く感じる。身体に強く感じる。

○身につまされる〓他人の不幸などが他人事でなく感じられる。

○身も世もない〓あまりの悲しさに自分の立場も世間体も考えていられない。

○身を誤る〓生き方を間違える。人生を踏み外す。

○身を厭^{いと}う〓身をいたわる。身体を大事にする。

○身も蓋^{ふた}もない〓あらわに表現しすぎて含みや味わいがない。

○子ども〓心身未分で、直観が豊かな、特有の時代を生きる存在。

○大人〓役割使命を自覚した存在。

○身の程知らず〓自分の能力や分際を知らない。

○居付く、居着く〓落ち着いてそのまま居続ける。よそから来て住み着く。

地面や床を強く蹴ると動けなくなる。体幹を使えば浮く。

○身土不二^{しんどふじ}〓身体と大地は一体で、切り離せない。人間は生まれた土地に身体が適応している。

(3) 呼吸・咀嚼・吸収・排泄 (生理機能)

○いい呼吸Ⅱゆっくり、深く、大きい呼吸。

感情が安定し、自律神経・内分泌系・免疫系が均衡する。腹圧が強化され、筋肉や神経が発達し、内臓が強化される。胸が広がり、姿勢がよくなり、呼吸器が強化される。血液が浄化され、心肺機能が高まる。

○息がかかるⅡ有力者の影響や支援がまじかに及ぶ。

○息が詰まるⅡ息苦しくなる。

○息の長いⅡ活動期間が長い。句点と句点の間が長い文章。

○息を吞むⅡ驚きや恐れで一瞬息を止める。

○息も吐かせずⅡ息をする間も与えないほど素早い。

○コミをとるⅡ腹にグツと力を入れて合図を交わす。能には楽譜も指揮者もないし、シテとワキの決まった合図もないが、出演者がコミで合図を交わす。

○食指が動くⅡものが食べたくなる。ものごとをしてみようという気になる。

○嚙んで吐き出すⅡ不快そうにぶつきらぼうにものをいう。

○嚙んで含めるⅡよくわかるように丁寧に言い聞かせる。

○死に仕度〓死ぬために必要なものを準備し整える。

○漱ぐ〓口をゆすぐ、うがいする。濯ぐ〓汚れを洗う。雪ぐ〓汚名を除く。

○垢抜ける〓洗練されて野暮なところがない。粹ですつきりしている。

○手垢〓何度も使われて新鮮みを失った物事。

○蔓が立つ〓野菜などの花茎が伸びて固くなり食用に適さなくなる。異常気象などで成長がおぼつかなくなると野菜は茎を伸ばし花を咲かせて次世代に種を託す。野菜の自死である。人間でいうならその盛りが過ぎた状態。

(4) 視聴覚(感覚機能)

○見る・観る・覧る・視る・看る・診る

目の働きで物の存在や動きをとらえる。目を通して内容をつかむ。読んで適否を調べる。睡眠中にあるイメージを作り出す。舌や手の感覚で物事を知る。現象の奥にある意味を読み取る。引き受けて世話をする。注意して見守る。注意深くうかがう。判断を下す。見極める。客観的に言う。重々しく言う。ゆとりを計算に入れる。視点を表す。

○見ぬが花〓ものごとは実際に見ないで想像しているうちが楽しい。

○見る影もない〓見るにたえないほどみじめである。

○味わう〓食物の味のよさを感じとる。物事の趣や面白みを感じとる。喜びや悲しみなどの思いを体験する。

○塩梅^{あんばい}〓料理の味加減。物事の具合。順序だててことをうまく運ぶ。

○聴く・聞く・訊く〓話を情報として受け取る。聞き入れる。問う。臭いを嗅ぐ。酒の良し悪しを舌で感じ取る。

○音色〓その音に独特の感じの音。

○音曲〓楽器の音楽。楽器に合わせてうたう俗曲。

○聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥〓知らないことを聞くことの恥ずかしさはそのときだけのこと。知らないまままで生涯をすごすのはもつと恥ずかしい。

○語るに落ちる〓問うに落ちず語るに落ちる。問われたときは用心して本心を漏らさないが、何気なく話しているときにうつかり漏らしてしまう。

○語るに足る〓語るだけの価値がある。語る相手としてふさわしい。

○味を占める〓一度体験したことが忘れられず、次にも同じことを期待する。

○臭い⇨不快な臭み。胡散臭い感じ。疑わしい気配。それとなく察する。

○匂い⇨よい香り。それらしい気配や趣。そのものが醸し出す雰囲気。
美しく輝く。

○鼻が利く⇨敏感に察知する。

○触る⇨手などをふれる。体にふれる。かわわりを持つ。

四、意味共有のないことば——使わない・言い換える

同じ意味で理解されないことばがある。意味が拡散したり、わかったようでわからなかったら、そのことばは伝わらない。あるいはあつてもなくてもよいことばもある。何も考えずに使われることばや使わなくてもよいときに使われることばもある。もともと意味がないのだから伝わる筈がない。

そのようなことばは使わない、言い換える方がいい。ここではこの種の典型なことばを取り上げたい。

(1) 僻遠語へきえん

僻遠語は真実のようで真実とかけ離れたことばである。使い続けるとウソが本当になってしまう。真実とかけ離れた意識を持つてしまう。

○自然環境

自然は環境ではない。自然は全体であり、すべての物質を包含ほうがんしている。そしてすべての物質の中にも含まれている。だから人間だけでみても、人間と自然を切り離すことはできない。自然と人間は一体であり、人間は自然の分身である。人間は自然に対して主語にはなれないし、自然を管理することもできない。人間が台風や地震や津波を防ぐことはできない。

環境は人間の外側にあるものを指す。人間と環境は原理的に切り離されており、別個のものである。例えば、家は独立した環境である。人間が主語になり、人間は家を建てたり、管理することができる。

自然環境あるいは単に環境ということばで自然を表すことは、真実のよう
で真実ではない。

○自然保護

人間は自然のちっぽけな一部であり、自然に対してできることはしたが遵うこと以外にない。しかも、人間は自然の生成や構造や運動原理について殆ど知ら



Rei

ない。そのような自然を人間が保護することなど不可能である。例えば、「自然保護区」というような地域を設けたとしても、それで自然を保護していることにはならない。その中へ人間が入れないようにしているだけである。そこで何かをすることを禁じているだけである。自然保護区にされた地域はそんなこととはまったく別に自然の摂理が機能しているだけで、人間の思惑とはまったく無縁である。

人間に自然が保護できるという考えはとんでもない思い上がりである。同じような傾向は「自然に優しい」「地球に優しい」というような掛け声に表れているが、これは家の埃の中にいる蚤のみが人間に優しくというのに等しい。

○人間と自然の共生

人間は自然と共生しているのではない。ただ、共生という概念は実はあいまいで「共に生きる」というような意味しかない。人間が理屈を考えて、「お互いに利益のある対等な共生」、「一方にだけ利益のある共生」、「特別の関係はないが共にあるという共生」というように分類している。自然と人間はこ

の内の後の二つにあてはまる。

しかし、共生を共に必要とされる関係と考えるなら、人間は自然の資源を使って生きる存在だから、自然は必要不可欠である。しかし、自然にとって人間はあってもなくてもよい物質である。地球は四五億年の歴史を持つが、人間はせいぜい五十万年の歴史しかない。地球は人間を必要とはしていない。むしろ、自然破壊をしているのは人間だけであり、自然にとって人間は邪魔者といえる。人間と自然の共生という概念はまったく真実ではない。

(2) 拡散語

拡散語は相反する意味があったり、内容が曖昧なことばである。どうにでも解釈できることばである。

○幸せ

為合わす、仕合わせが元々の意味で、運命のめぐり合せのことである。当然、よいめぐり合せとわるいめぐり合せがある。普通はよいめぐりあわせで使わ

れるが、その内容は特定されない。金であったり、愛であったり、絆であったりする。しかも、幸せは個人についてのことばである。

幸いということばがあるが、これは個人ではなく、ある集団についてのことばである。みんなの幸いである。幸せと幸いには天地の違いがある。

○頑張れ

「頑張る」ということばには、我を通す、精一杯努める、動かないという意味がある。これだけでも意味は拡散する。その上、何を頑張るのかもわからない。しかも、多くの場合、相手を激励することばとして使われる。しかし、この「頑張れ」は、傍観者のことばになる。他人事になってしまふ。ともに努力しようという意味はなくなる。例えば、東北の災禍で被災した人が、「頑張れ」といわれて「死にたくなった」という話を聞いたことがある。

私は妻の介護について、「大変ですね。頑張ってください」と言われたことがある。正直なところ、当たり前のことを、普通にしているのに、何が大変で、何を頑張ればいいのか、さっぱりわからない。

(3) 無用語

無用とは役に立たない、必要がないという意味である。ことばにも無用なことばがある。本当の意味が伝わらないことばである。

○コミュニケーション

私はコミュニケーションとは何かと、居合わせた7人に聞いたことがある。その答えはこうだった。対話である、話を聞くことである、思いやりである、仲良くすることである、喫茶店へ行くことである、酒を飲んでつきあうことである、相手を知ることである。このことばには普遍性がない。聞く人によってまったく意味が違ふ。これでは無用というしかない。

コミュニケーションという英語の語源はギリシャ語のコムニスである。コムニスは共有地という意味である。日本語で言うなら一致点がある、共通点があるということになる。「コミュニケーションを取れ」ということは、一致点・共通点を探しなさいという意味である。

○システム

体系というのが元々の意味のようである。秩序があり、系統だった組織や制度ということであろう。また、コンピューターなら情報処理の方式や装置ということになる。システムというだけでは何のことかわからない。

日本語なら仕組みということであろう。何が、どうして、どうなるという枠組みのことである。何かをするについて、どれだけの要素があつて、それがどんなつながりになっているのかということである。わけのわからないシステムなどと言わずに、どんな仕組みになっているかを説明する方がよい。

○持続可能な開発

どうしてこんなややこしいことばをありがたがるのだろうか。

これは、環境つまり自然と、開発つまり資本主義における経済開発の共存を提言した「世界保全戦略」（一九八〇年・国際自然保護連合と国連環境計画がまとめた）の翻訳語である。

話は簡単である。自然と経済開発は相反する。何故なら、有限な自然を、経済は無限であると前提しているからである。自然資源を使い潰す経済は自然破壊を当然の帰結とする。

持続可能という翻訳語を使うなら、循環ということばを思い起こしたい。自然は循環している。巡り巡って元へ戻ることを繰り返している。これが自然である。

○生態系

辞書によると、生態系とは、ある地域のすべての生物群が一体であることという説明されている。これもややこしい翻訳語である。ヨコモジにするエコシステムとなる。余計にわかりにくい。

実はすべての生き物は生命が連鎖しているということなのである。食べたり、食べられたりする食物連鎖の関係はその典型である。日本語には生命連鎖ということばがある。生態系などと言わずに生命連鎖といえばよい。

(4) 不要語

不要語とは必要でないことば、いらぬことばである。あつてもなくてもよいことばである。考えずに使えることばである。思考放棄、思考停止をもたらしことばである。使わなくてもよいときに使えることばである。その現代における典型例を示そう。

○凄、凄く

いま最も頻繁に使われていることばである。普通の生活者から、ことばを扱う専門家、例えば、小説家・落語家・学者・アナウンサーまでがひっきりなしに使っている。

凄ということばは、元々の意味は夫が妻に水をぶっかけられるということと、身震いするほど恐ろしいということである。転じて、身震いするほど素晴らしいという意味もある。尋常でないという意味もある。

どんな場合にも、使わなくともいいときにも、何も考えずに使われている。この言葉の氾濫はまさに思考放棄であり、思考停止の象徴である。恐ろしい、

素晴らしい、普通でないのどれかに言い換えられるのならまだいい。「凄いおいしい」「凄く心配」「凄い楽しい」などとなると、凄いには「とても」とか、「大変」という意味はないので、何を言っているのかわからなくなる。

(5) 間違語

間違語とは、本来の意味とは違うことばである。

○消費者

人間を消費者としてだけとらえるのは間違いである。消費者は人間の一面ではあるがすべてではない。人間は消費するだけの存在ではない。生産もするし、加工もするし、貯蔵や廃棄もする。泣いたり、笑ったり、怒ったりもする。あるいは仲良くしたり、闘ったりもする。

人間を消費者としてとらえるのは間違いである。人間は自然と宇宙と共同体と文化に生かされている生命体である。普通のことばでいうなら生活者、つまり、生命を活かす者である。もう少し哲学的に言うなら百姓という方が

よい。つまり、人間は百の姓・職能をこなす存在である。少なくとも生活を動詞で考えるなら、食べる・健康を図る・着る・住む・動く・遊ぶ・育てる・知る・つきあう・納める・貯める・借りる、備える、というようにまさに人間は何でも屋なのである。

五、身体の声

身体部位にどんなことばがついているかは、第三章「考えることば」で整理した。身体についたことばは、時代を越えて広く知られ、使い続けられてきた伝統がある。しかも、広く知られ意味が定まっている。

それは、詩文の句やことわざや故事成語や慣用句である。私は、意味の定まった伝統的な日本語はこの中に含まれていると思う。

身体についたことばの内、本質的な問題を考える場合に使われるであろうと思われることばは、辞書類や参考文献から私が、意図的に選んだ。それらの内の主な身体部位について、「身体が発する声が何なのか」、「それはどうすれば聴くことができるのか」、さらに「その身体部位から本質問題を考えたらどうなるのか」、それらについて考えてみたい。

(1) 腹

腹はこころの所在である。太古よりこころは腹にあるとされている。

腹・胆・腸という文字は、身体用語で触れたように、太古からこころという意味で使われてきた。また、切腹が初めて記録に表れるのは七一年の「播磨国風土記」であるが、これは内臓にこころがあるという考え方からきている。真心を相手に見せる手段として腹を切ったのである。切腹は原始・古代の内臓占いに端を発しており、武士に固有のものではなかった。神も、女性も身の潔白のために腹を切った。

意思や決意、覚悟に関連することばが腹についている。

物事を理解し、平静な対応を促すことばも腹についている。

相手と同期するのも、相対するのも腹のこころ次第である。

物事に対する喜怒哀楽は腹で判断される。

こころの美醜は腹で決まる。

直面する物事の快・不快の識別は腹がする。

○腹が発する声は、「直観」であり、「快・不快」ではないかと思う。

○腹の声を聴くには、「生活の自然密着度」が高い方がいい。原生林に身をおくのもいい。海や山でキャンプするのもいい。あるいは野菜づくりをするのもいい。

○腹から考える「自然観」

自然界は物質世界である。動植物から鉱物や微生物まで、すべての物質は、優劣なく依存し合い、一体である。すべてはよどみなく循環している。

人間は自然の分身として、生かされている存在である。人間自身の内にも酸素や水分など自然は厳然と息づいている。

人間にとって自然は、畏敬し、あるがままに受け容れ、遵うべきものである。自然に間違いはない。自然から離れた人間だけが間違う。自然破壊を犯すのも人間だけである。

(2) 口

食べ物との関連で、食欲や味覚を意味することばが多い。

正確さ、誠実度、節度を表すことばが口についている。

洞察力についてのことばも注目される。

口も物事に対する快・不快を識別する。

生活程度、暮らし向きのことばも口についている。

○口が発する声は、「コミ」である。コミとは、息を吸い込む、あの吸い込みである。相手のコミを感じることができれば、相手のことはわかる。同期することができる。

○口の声を聴くには、「慎食」がいい。相手のコミがわかるためには満腹では適わない。私の実験では、一日の食事摂取量を体重の二%までにしておけば過食にならない。過食をしなければ腸の蠕動運動が活発になり、相手

の呼吸を同期できる。

○口から考える「こころ」と「魂」

こころは、人間の身体の働きである。こころは腸の働きで、常に快を求める。魂は、宇宙の摂理を受け容れる気の働きである。気は人間同士だけでなく、すべての生命体と連鎖し、共振している。魂は快も不快も、その両方も含めて求める。

人間の肉体には二つのたましいが宿る。こころを司る「魂」と、肉体を司る「魄」である。生きているときは二つがつき、死ぬと離れる。「云」はたちのぼる気、「白」は青白い色を表す。人間が死ぬと、ふたつのたましいは青白い気となってたちのぼる。死は、萎えることで、肉体から魂が離れることである。

(3) 手

嬉しいことが手にある。

能力や意欲に関することばが手についている。

仕事とそのけじめのつけ方も手にある。

援助・支援についてのことばが手についている。

何かを獲得するのも手である。

人が嫌がることに対応する気概が手にある。

○手が発する声は、「手仕舞い」つまりケジメのつけ方である。自分が始めた事は、それが何であれ自分で最後まで仕切る。事を始める最初に最後を考える。最初に最後を考えておけば、ケジメは間違いなくつけられる。

○手の声を聴く最上の方法は、「自給自足」だと思う。少なくとも食について自給自足をする、最初から最後まで、どうなったらどうするという計画がある。例えば、野菜づくりをすると、草に負けたり、虫に食べられたり、異常気象で萎立ちしたりする。上手にできなくても、食べる、捨てるなら肥料にする、干して草除けに使うなど、さまざまな手仕舞いがある。



○手が考える「自給自足」

自給自足とは、自然から感謝して授かり、自分でつくれるものは自分でつくり、感謝して満足することという。

人間が必要とする生活資源はすべて自然の恵みである。食糧も、熱量も、人間関係さえも、かつては自然から与えられていた。それが現代では、自然の恵みの大半を人間が捨てている。インスタント・ラーメンは石油製品だし、熱量はすべて電力になっている。人間関係でさえ行政やインターネットのあてがい扶持になっている。

自分でつくるものは現代ではほ

んの僅かである。かつての日本は食糧自給率が100%を越えていたのに、今では数%になっている。

旬の野草は豊富にあり、優れた食糧である。マンション住まいだってプランターで野菜はつくれる。外食や出来合いの惣菜に頼らず自分で料理はできる。このあたりからでも食の自給はできる。自給自足の優れたところは、自力には限界があるので助け合いが生まれること。自分ではすべてをつくれないので贈答やお裾分けが生まれること。これが地域の、生活共同体という連帯になることである。

(4) 尻

全体としてよくないことが尻についている。

動作が緩慢だったり、消極的だったり、長続きしない。

一ヶ所に長く留まったり、逆に落ち着くという意味もついている。

浮気性も尻についている。

切迫感、逃亡という意味がある。

責任のないことを自ら負うたり、人に負わせることが尻にある。

物忘れも尻についている。

隠し事、反抗というのも尻についている。

よいこととして、他人に対する激励がある。

○尻は、「消極的言動」の声を発する。なにが、なぜ、そうさせるかを聴けばいい。

○尻の声の聴き方は、「毎食後の排泄」であると思う。私の人体実験によると、週二回の半日断食をするようになってから、毎食後二時間前後で排泄があるようになった。さらに、一日二食に変えてからも排泄は日に三回ある。これは赤ん坊と野生動物の水準である。

腸が十二時間以上空くと、腸の蠕動運動ぜんどうが活発になり、便秘にはならない。感性は腸が空なときに鋭くなる。私は、寝ているときや排泄の時に、新しい気づきやひらめきがよくある。

○尻の本質論「生活観」

生活は生命を活かすことである。

生命は自然によって与えられたものであり、人間は自分一人で生きているのではなく、生かされて生きる存在である。

生命を活かすということは、生かされている役割を果たすことである。自分の生命を維持するだけでなく、自分を越えた役割使命を遂行する生き方が基になる。それは誰かから与えられるものではない。自ら直観で自覚するものである。

自分の役割使命を自覚する場は多様である。

① 家族の生活、自分の生活、地域における生活、仕事における生活。

② 宇宙、自然、社会、文化。

③ 食べる、健康を図る、着る、住む、動く、遊ぶ、育てる、知る、つきあう、納める、貯める、借りる、備える。

(5) 耳

鑑賞の素養を示す。

鋭い聴力、高い理解力は耳についている機能である。

耳は快・不快を聴きわけ。

珍奇性が耳についている。

機会に恵まれた嬉しさが耳にある。

よくないこととしては落胆、不愉快という意味がある。

辛さも耳についている。

軽薄さ、努力の足りなさも耳についている。

○耳は、「理解力・鑑賞力」を示す。何を、どのように理解し、鑑賞しているのか、聴くことになる。

○聴くとは、どうすることか？耳で音声を聴くだけではない。語感を読み取ることも、語間を感じることも、無言の言を体感することも、必要である。

「直観」を萎えさせないことが、音を越えて聴くことにつながる。

○耳が洞察する「ことば」の本質

直観があればことばはいらない。ことばが伝わらなくなると、文字がいる。文字に意味共有がなくなると思考が止まる。語彙が貧弱だと思いが放棄される。現代はそういう時代である。

しかし、意味の定まった伝統の日本語を失わない限り、思考はできるし、伝わることばを紡ぐことはできる。

(6) 目

鑑識や理解の深さがかかわっている。

目は快・不快を見極める。

監督能力も目にある。

聡明度にも関係がある。

熱意や熱中度ともからむ。

他人に対する支援という面も持っている。

○目は、「聡明と熱意」を語る。

○目の声は、深い「観察」によつて聴く。観察は一切の先入観を捨てて、観ることである。その結果を、すべてであるがままに受け容れることである。受け容れるとは、一切の評価をしないことである。無条件に肯定することである。

○目が考える「愛」の本質

亀井勝一郎著「現代人生論」を引く。愛は人生の根本の覚悟である。人間の物欲や情欲がすさまじければすさまじいほど、人間はそれを機縁として愛の純潔を志す。愛は欲情との闘いであり、愛は死と同じように危機の上にある。だから、愛はいのちのすべてをかける。愛はそこに悔いることのない死に場所を求めることである。

愛の根本は深い関心である。深い関心があるからこそ、相手をつつむ観察

がある。観察によつて知ることが愛につながる。

(7) 骨

骨には、身体の根本、物事の根本という意味がある。

大切なもの、かんどころという意味もある。

骨は物事の快・不快を本質的に識別する。

主義・信念・意志の有無が問われる。

努力や意地も骨に絡んでいる。

労苦もある。

後始末という意味合いもある。

○骨は物事を中心であり、根本である。

○骨の声は、見えないものを感じ取る直観でしか聴くことができない。ただ、骨は身体の根本である故、必ず快を選択する。身体が快と感じるところを

聴けばいい。

○骨から観る「直観論」

直観は、経験や推理や理論によらずに、真理や本質を直接に理解することである。直観は心身未分のときに働く。しかも、直観は身体に発する。身体は常に快を選択し、直観は身体に遵う。それ故、直観は間違いない。正しい理論は直観を容かたちにしたものであり、直観に導かれない理論は間違っている。

六、身体機能の声

身体部位ではなく、身体機能についたことばも、何かを語る。その声も時代を越えて、定まった意味で伝わっている。それぞれの身体機能についていることばを分析してみたい。

(1) 精神機能

○以心伝心

ことばを使わなくても、こころが通じる。これは身体で感じ合うということである。脳が判断する前に身体が感得する。直観によって相手に同期している状態なら、相手のこころはわかる。

身体とこころはつながっている。少なくとも十歳くらいまでの子どもは心身未分である。

しかも、身体がこころを支えている。脳が身体を支えているのではない。

(2) 身体機能

○真つ直ぐに立つ

人間が二足歩行になったことが、人類史の画期的出来事である。このときから人類の歴史は大きく変わった。

真つ直ぐに立つことは、実は非常に難しい。それは元々四足で移動していた生き物が二足になったのだから、自然ではない。骨格で立つことがなかなかできない。筋肉を使って立とうとする。そこに無理が生じる。

スポーツ界や被災者支援でメンタル・トレーニングが行われるが、これは脳で身体を支えようという試みである。殆どの場合、うまくいかない。心身の役割が逆になっているからである。

身体の声を聴くことができれば、人間は間違わない。心身が分離すると脳主導になり、身体は固まる。もともと身体は快を選択するので、身体が固まってしまったら、うまくいく筈がない。

真つ直ぐに立つということは、骨格だけで立つことである。そうすると骨

格が真つ直ぐになる。

骨格が真つ直ぐになると、楽に立ち、楽に歩くことができる。農家の老婆が六十キロの米俵を三つも担げるという話を聞くが、これは骨格で立ち、骨格で物を担いでいるからである。

(3) 生理機能

○いい呼吸

いい呼吸とは、ゆっくり、深く、大きい呼吸である。

呼吸が合うといえ、お互いに一致している状態である。阿吽の呼吸という言い方もある。

仕事の呼吸がわかるといえば、仕事をうまく進めるための微妙な調子が合うということである。

伝統芸能の能の専門用語かもしれないが、「コミをとる」という表現がある。呼吸が合図になり、呼吸だけで芸を合わせることをいう。楽譜がなく指揮

者がいなくとも、音が合う。舞台監督がいなくとも、演技が合う。吐く息、吸う息、止める息だけで意思疎通ができる。いい呼吸は、相手と一体となり、相手が自分と同じようにわかる状態をつくる。

(4) 感覚機能

○みる

みるという機能は、目に見えるものは勿論であるが、目に見えないものをみるところに意味がある。

また、みるには、現象の奥にある本質を読み取るという意味もある。さらに、みるには、身体が感じたことを知るという意味もある。実は、みるは視聴覚だけでなく、身体部位のすべてが感じていることをみる、あるいは聴き取るということに深い意味がある。

参考辞書・参考文献

明鏡国語辞典 第二版 大修館書店

新明解国語辞典 第三版 三省堂

新版 広辞林 三省堂

新漢和辞典 改訂版 大修館書店

例解古語辞典 三省堂

新字源 角川書店

「勘違いの日本語、伝わらない日本語」 北原保雄 宝島社

「問題な日本語」 北原保雄 大修館書店

「その言葉だとも何も言っていないのと同じです」 吉岡友治 日本実業出版社

「日本の大和言葉を美しく話す」 高橋こうじ 東邦出版

「考える方法」 桐光学園十ちくまプリマー新書編集部編 筑摩書房

「すごい言葉」 晴山陽一 文芸春秋

「日本人も悩む日本語」 加藤重弘 朝日新聞出版

「正書法のない日本語」 今野真二 岩波書店

「日本語が亡びるとき」 水村美苗 筑摩書房

「日本語の科学が世界を変える」 松尾義之 筑摩書房

「縄文のコトダマ」 林英臣 博進堂

「自然学の展開」 今西錦司 講談社

「人間学入門」 小原秀雄・岩城正夫 群羊社

「木に学べ」 法隆寺・薬師寺の美 西岡常一 小学館

「武術の新・人間学」 甲野善紀 P H P 研究所

「日本の身体」 内田樹 新潮社

「筋肉よりも骨を使い」 甲野善紀・松村卓 携書

挿絵作家のことば

佐藤 雫

今回、表紙のイメージは自然の循環を意識しました。モチーフにトンボを選んだのは、動物だけでなく、昆虫も循環の一部であると、改めて感じたからです。というのも、春になり花が咲き、緑もキレイにそろってきたと同時に、虫も増えてきたからです。暑さが増すにつれ、夏の夜に鳴く虫を心待ちする自分もいます。見た目はあまり好かれませんが、虫もふとそこにいるのだよという気持ちですが、今回の選択の理由です。

また、いままでデッサン寄りにイラストを描いてきましたが、今回は少しテイストを変えてみました。受け容れてもらえるかはわかりませんが、自分なりに表現をしようとした結果です。これからも挑戦を続けていきたいです。

私は言葉というものは時代によって変わっていくものだと思っています。小学校の頃から問題にされてきたのが、「ら抜き言葉」で、今でも議論されているのではないでしょうか。ほかの言葉も変化し、意味を変えるものもたくさんあったと思います。それは日本語だけでなく、外国語にもいえることなのではないでしょうか。ただ、言葉本来の意味を理解し、立ち返ることも大切であると思います。

あとがき

いまなぜ母国語としての日本語を問題にするのか。私が教えを乞うた諸先輩の、日本語に対する問題意識と、日本語の特異性に関する評価を要約する。

〔問題意識〕	〔日本語の特異性〕
言葉が上滑りし、切れ切れになっている。心に沁み込まない。 他人の言葉を耳で聞いてつかめない。 話している相互の心情の展開がない。 母国語を失うと足場がなくなる。文化にとって悲惨である。 文法の乱れ、流行語の多用、ネットいじめ、議会のやじ、ヘイトスピーチ……粗暴な言葉。	日本人はかなと漢字を変換しながら使っている。 日本語は言葉と国籍が直結した体質的な言語である。 翻訳に優れている。 あいまいな事柄を上手にすくいとる。 (古井由吉 共著「考える方法」) 風土の中で生まれた大和言葉は心に染みる。 大和言葉は全ての音節の母音が平等に響く。 日本は言霊によって栄えている国。 美しい心から生まれた正しい言葉はその言葉通りの良い結果を実現する。 (高橋こつじ「日本の大和言葉を美しく話す」)

日本の科学技術の本当の長所や強さは正しく理解されていない。 二一世紀、たくさんの日本人がノーベル賞を受賞したのは日本語による思考に負っている。	日本人は日本語で科学をしている。 日本の創造的な科学者にとって最大の武器は日本語による思考である。 日本は母国語Ⅱ日本語で科学ができる世界でも稀な国である。 (松尾義之「日本語の科学が世界を変える」)
英語の時代における言語の凋落。 日本語を優れた書き言葉として護る。 微妙な思考は母国語でしかない。	自然科学を日本語で思考できる。 日本語はものともとの関係性を思考するのに適している。 外国語を翻訳によって自国語にとりこんでいる。 日本に母語の地位を脅かされた歴史はない。 日本語はこの言語グループにも属さない。 (水村美苗「日本語が亡びるとき」)
日本はこのままではいけない。 そのために日本をもっと知る。その気づきのキッカケは縄文語である大和言葉である。	日本は信仰・神話・言語・民族の四要素が一つに連なっている国。 大和言葉の四八音の一音一音に意味がある。言葉に魂が宿っている。 大和言葉は自然発声音が基礎である。 漢字を受け入れてしまうだけの語彙の豊富さがある。 母音・子音・感情音・動物音・自然音のすべてを言語脳で処理している。 (林英臣「縄文のコトダマ」)

私の日本語に関する問題意識は、日本人の語彙の貧弱さ、伝統的な日本語に対する無知、身体の声を聴けなくなっていること、ことばが伝わらなくなっていること、そのために本質思考の停止や放棄が起こっていることにある。

私は、時代を越えて使われ、意味や感性が共有されている、伝統的な日本語が身体用語と身体機能用語に含まれていると思っている。それらのことばを丁寧に掘り起し、伝えていくことが、本質的な思考を取り戻すことに役立つと思っている。

ことばは自然に変わるし、政治権力によっても変わる。また、ことばが亡びることもある。しかし、大和言葉のように、それを含めて身体用語や身体機能用語のように、伝承の努力によつて護ることも可能だと思う。

前著「目からうろこが落ちるはなし」で試みた異世代の優駿による原稿の校閲をこの本でも行つた。志ある人達に伝わる本にしたためである。

お知恵を拝借した方々のお名前を記して感謝したい。

佐藤濤、松原圭司、横山裕一、今井いおり、強田国夫、福丸孝之、佐々輝夫、大西貫也、南正士のみなさん、ありがとうございます。

佐藤眞生（さとうまお）

縄文魂の探究と実践。

「米」耕作一反・「野菜」耕作一反。味噌と旬の漬物、ビールとうどんを自作。

一日二食、約五百グラム、穀菜食中心。丹田呼吸、骨ストレッチ、指ヨガ。野草てんぷらの実演。月刊対話紙「自然人」「芸術の森」発信。縄文直観塾主宰。

縄文魂にかかわる著作

「縄文魂」「縄文の遺伝子」（かんぼう）

「ふるさと茨木探検ガイド」「茨木がまちになった六つの物語」（かんぼう）

「こころは腸次第」「葬式革命」（かんぼう）

「野草てんぷら」（バーズアイ出版）

「ふるさとー日本生まれ変わりの基本構想」「足るを知る」「楽しくつながり自由に生きるー足るを知る生き方の物語」（茨木未来倶楽部）

「植物との対話」「目からうろこが落ちるはなしー縄文自然観」（茨木未来倶楽部）

（「足るを知る」以下は「マオじいの結」電子書籍シリーズ）

マオじいの結^{マオ}「考えることばの事典」

初版発行 2015年7月30日

著	者	佐藤眞生
表紙・挿画		佐藤 滯
揮毫・題字		元谷裕蘭
		裏表紙 池田寿村
発	行	茨木未来倶楽部
本	文	編集工房D E P／桐生敏明
組	版	
印刷・製本		モリモト印刷株式会社

© Mao Satou Printed in Japan 2015